

# 東日本大震災における「何でもやります隊」の活動とその意義

## Activities of "Nandemoyarimasu-Tai" and its Significant Approach Provided at the 2011 Great East Japan Earthquake and Tsunami Disaster

○佐藤 健<sup>1</sup>  
Takeshi SATO<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

Function of hospitals and clinics were also limited due to serious human and physical damages caused by the 2011 tsunami at coastal areas of Tohoku region. Various support activities were provided to protect life and health of the tsunami survivors. This paper outlines introduces and outlines one of these support activities, called "Nandemoyarimasu Tai" as a group of volunteers who supported health and medical activities for the tsunami affected people at Minami-Sanriku Town of Miyagi Prefecture. It also discusses significance of the approach provided by the volunteer group.

**Keywords :** Health, Volunteer, Minami-Sanriku Town, Great East Japan Earthquake

### 1. はじめに

東日本大震災では、津波被災地における保健医療システムが壊滅的に破壊された。市町の庁舎や病院をはじめ、保健所や地域包括支援センターなど保健医療に係る多くの施設が津波による流出や浸水の物的被害を受けた。また、入院患者や施設利用者、職員の人的被害も発生した。このような状況にあっても被災地の人々の命と健康をまもるために、著者らは、2011年3月18日から宮城県保健福祉部医療整備課に協力する形で、災害保健医療支援室（以降、支援室と呼ぶ）を活動場所として、被災地の保健医療活動の支援機能の一翼を担った。

前報<sup>1)</sup>では多岐にわたる支援室の活動のうち、緊急構築した情報共有システムの概要とその活用事例を報告した。本報では、南三陸町地域包括支援センターをカウンターパートとしたボランティアチーム「何でもやります隊」<sup>2),3)</sup>の活動概要を示し、その被災地支援のあり方の意義を述べる。

### 2. 災害保健医療支援室の概要

支援室は、東北地方太平洋沖地震の発生から概ね一週間後に立ち上げられた保健医療に関する緊急支援機能であり既存の団体や組織ではない。支援室のコアスタッフは、表1に示す5名であるが、多くのボランティアの協力を得て支援室の活動が成立した。ボランティアスタッフ

の活動の時期と期間はまちまちであり、必ずしも保健医療分野を専門としないボランティアも少なくなかったものの、長期間にわたって支援室の活動を支える有能なボランティアスタッフが数多く存在したことも忘れてはならない。

また、支援室の主な活動は、被災地に対する人や物資の供給と調達、被災地と被災地後方・遠方の支援者との情報共有、ワークショップやセミナーの企画・開催などであり、災害時における人の命と健康をまもるための表2に示すような支援活動を展開した<sup>4)</sup>。

表1 支援室のコアスタッフ

上原 鳴夫* (代表)	東北大学大学院医学系研究科国際保健学分野・教授
国井 修*	ユニセフ協会ソマリア事務所
長谷川 泰三**	大阪府済生会千里病院千里救命救急センター・副センター長
田中 秀治**	国士舘大学大学院救命救急システムコース・主任教授
佐藤 健** (事務局長)	東北大学大学院工学研究科災害制御研究センター・准教授

\*: 宮城県災害保健医療アドバイザー

\*\* : 宮城県災害保健医療スタッフ  
所属、肩書きは支援室での活動時点のもの

表2 支援室の活動項目

1. 医療救護チームの派遣登録補佐とブリーフィング、デブリーフィング
2. 医療救護活動に対する情報支援、衛星携帯の提供、ロジチームの派遣
3. 現地医療救護活動と後方支援をつなぐメーリングリスト、ウェブページの構築
4. 医療救護サーベイランス
5. 避難所調査の支援
6. 宮城県沿岸15市町・保健所と県保健衛生担当者間の情報共有（メーリングリスト、会議など）
7. 「御用聞き」と現地要請への対応（物資調達と配備）
8. 避難所の業務補佐とニーズ把握（「何でもやります隊」の派遣）
9. 公衆衛生ボランティア、環境調査チーム、シックハウス調査チームの派遣
10. 夏季衛生対策の実施支援
11. 災害に備えるためのワークショップ、セミナーの開催

### 3. 南三陸町の地勢と被災概況

「何でもやります隊」の活動フィールドとなった宮城県南三陸町の地勢と被災概況を示す。

町全体の面積は163.74km<sup>2</sup>であるが、そのうち森林が占める割合が77.1%、農用地が占める割合が7.9%である一方、宅地が占める割合はわずか2.5%となっている。南三陸町周辺の航空写真を図1に示す。志津川湾に注ぐ河川によるわずかな扇状地に市街地が形成されている。なお、南三陸町の行政区は、志津川、戸倉、入谷、歌津で構成されている。

また、宮城県沿岸部の津波の浸水高を図2に示す<sup>5)</sup>。南三陸町志津川での浸水高（津波がない場合の潮位（平常潮位）から観測点の浸水水準までの高さ）は20.5mであり、仙台湾の沿岸部との比較で10m程度、浸水高が高くなっている。

東日本大震災の発生から約1か月後の平成23年4月3日の時点で発表された南三陸町の被災概況は次の通りである。死者は396名、行方不明者（届出数）は612名、建物被害の概数は、戸倉地区で520戸（り災率約75%）、志津川地区で2,020戸（り災率約75%）、入谷地区で10戸（り災率約2%）、歌津地区で780戸（り災率約55%）、合計3,330戸（り災率約62%）、避難者は8,719名と、甚大な津波被害を受けた。

三陸沿岸に位置する南三陸町と仙台湾に面した名取市について、それぞれの全人口に対して津波の浸水の影響を受けた地域人口の割合を図3に示す。南三陸町は前述したように4つの行政区から構成されており、ほとんど津波による浸水がなかった入谷地区の人口は、南三陸町全体の11%であり、残りの約9割の人口が津波の影響を受けた地域に居住していることがわかる。一方の名取市は、津波で浸水した閑上地区、下増田地区を合わせた人口は、全人口の17%であり、残りの8割以上の人口は、津波による直接的な影響を受けない地域に居住していることがわかる。同じ宮城県内の沿岸部に位置する市町にあっても被災状況が大きく異なる。

さらに、南三陸町の町庁舎が津波により流失し、戸籍や介護保険等に関する情報を全て失った。また、南三陸町に存在した全ての医療機関は壊滅的な被害を受け、カルテを消失し、患者情報の全てを失った。そのことにより、保健師による全戸訪問調査、医療支援チームによる訪問診療と情報収集が行われた。これらの情報は、南三陸町医療統括本部に集約され、西澤匡史医師（宮城県災害医療コーディネーター）が統括責任者となった。

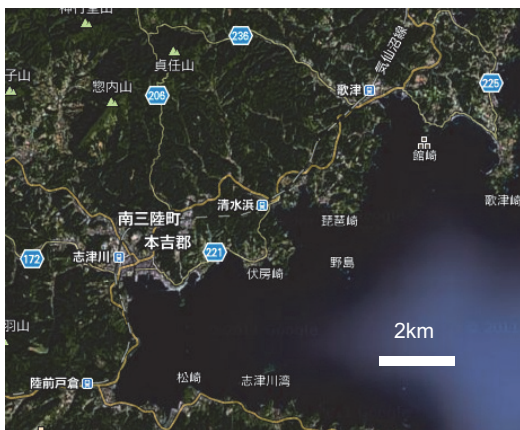
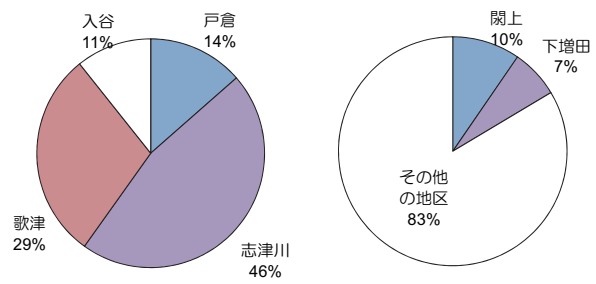


図1 南三陸町周辺の航空写真  
(Google Mapから引用)



図2 宮城県沿岸部の津波の浸水高



(a) 南三陸町 (b) 名取市  
図3 市町の違いによる津波の影響度合

### 4. 「何でもやります隊」の活動

#### (1) 「何でもやります隊」の発足と特徴

南三陸町地域包括支援センターの主任保健師から、「避難所において被災者の要望に柔軟に対応して働いてくれる人がほしい」という要請を受け、避難所滞在型ボランティアとして、「何でもやります隊」を考案し、震災発生1か月後の4月上旬から6月上旬ごろまでの約2か月間にわたって、支援室から「何でもやります隊」の隊員を南三陸町内の避難所へ派遣した。

「何でもやります隊」の隊員は、避難所運営者の要請に応じて何でもやるという基本方針のもと、多様な業務を支援するとともに、被災者と寝食をともにしながら刻々と変化する各避難所のニーズを吸い上げて後方支援につなぐ役割を担った。隊員の最初の派遣は、南三陸町平磯地区の介護老人保健施設ハイムメアーズの2階に設けられた避難所に対して、4月7日から開始された。

なお、「何でもやります隊」の隊員として活動に参加したボランティアは、初めのうちは、日本国際保健医療学会の学生会（jaih-s）の有志や東北大学の学生が中心であったが、支援室のホームページやツイッターでの呼びかけにより学生や社会人、保健師や栄養士の専門家も含み、延べ50人を超すボランティアの協力を得た。

「何でもやります隊」の活動内容は、表3に示すようなマンパワーとして被災者の生活を支援するだけでなく、外部の支援者・支援団体とのつなぎ役として、遠慮して本音を隠してしまいがちな被災者のニーズ（隊員間では、「こっそりニーズ」と呼んでいた）を外支援者に対して代弁するなどの橋渡し役も担った（表4）<sup>2)</sup>。

表3 隊員の主な活動内容<sup>2)</sup>

1. マンパワー
<ul style="list-style-type: none"> <li>掃除、炊き出し、給水、物資搬入の手伝い</li> <li>物資仕分け作業</li> <li>車での入浴送迎</li> </ul>
2. 外部団体・保健師等のサポート、つなぎ役
<ul style="list-style-type: none"> <li>生活再建支援受付のサポート、メガネ無料配布の手伝い</li> <li>救護班看護師の手伝い</li> <li>生活支援センターの保健師ミーティングへの参加</li> <li>外部ボランティア団体へのニーズ伝達</li> <li>ラジオ体操の呼びかけ</li> <li>事務補助</li> <li>記録を支援室へ報告、保健医療関係者への情報提供に貢献</li> </ul>

表4 滞在型支援による信頼関係構築後の活動内容<sup>2)</sup>

1. 衛生環境の整備の手伝い、提案
<ul style="list-style-type: none"> <li>トイレ掃除のチェックリスト作成</li> <li>感染症予防の啓発・ポスター制作</li> <li>手洗いキャンペーンの開催</li> </ul>
2. 個別ニーズへの対応
<ul style="list-style-type: none"> <li>役所手続きの付き添い</li> <li>要支援者の生活支援</li> <li>学生の勉強環境整備、参考書集め、家庭教師代行</li> <li>避難所から保健サービスへの連絡体制構築のための状況把握</li> <li>必要な人への情報伝達整理</li> <li>悩み相談</li> <li>話し相手</li> </ul>

また、「何でもやります隊」の特徴として、前述した「滞在型」の他に、「引継ぎ型」を挙げることができる。一人の隊員が被災者と寝食をとると言っても、その滞在期間は1週間程度となる。そこで、同じ避難所に対する支援を継続するために、支援活動から帰還する隊員とこれから支援を開始する隊員との間で引継ぎを行い、「何でもやります隊」としての支援を繋いでいくことである。避難所滞在型の支援により、隊員と被災者の間の顔の見える信頼関係が生まれると同時に、支援を引き継ぐことにより、「何でもやります隊」の支援に対する信頼獲得にもつながったものと考えられる。

(2) 「何でもやります隊」隊員の報告事例

「何でもやります隊」の隊員は、毎日、活動報告をメール等で支援室に報告することとした。隊員からの報告は、後方支援に対して、避難所ごとのニーズの変化の早期把握を可能としたことに加えて、避難所ごとの衛生環境や生活実態の把握から事前予防型の対策を可能とすることに貢献した。

南三陸町の主要な避難所の一つであるホテル観洋に派遣された「何でもやります隊」のある隊員からの報告の一部抜粋を表5に示す。避難所生活のタイムテーブルをはじめ、避難所ごとの課題やニーズの変化を後方で把握するために貴重な情報源となった。

表5 「何でもやります隊」隊員の報告書の事例（抜粋）

<p>◎2011年5月15日、ホテル観洋 何でもやります隊第7次隊 ○○○○ 本日は班長（フロア長）の挨拶と室内点検が行われ私たちも同行しました。簡単な挨拶をして健康に関するチェックシートを配り、室内点検をするというものでした。在宅率が低く、掲示板での周知ができていなかったと思われます。ほかにもそのような傾向があります。自治会が動き出すにつれて、掲示板の存在が大きくなるので、掲示板の軽視は改善すべき点であると思われます。今日は天気も良く多くの催し物があり、老若男女多くの方が足を運んでいました。このようなイベントがあると、運動促進にもつながると（中略） トイレチェックの作業中に見た手洗い率の結果を出しました。15人中水洗いをした人は8人、うち2人はアルコール消毒までしていました。食事前のアルコール消毒はほぼ100%です。過度のアルコール消毒の推進が逆に手荒れなどを引き起こし悪循環に（後略）</p>
<p>◎2011年5月16日、ホテル観洋 何でもやります隊第7次隊 ○○○○ 本日は配膳手伝いの際に新しい方が加わっていました。日に日にお手伝いをして頂ける人の数が増え始めています。ゴミ捨てを手伝っている光景も増えてきました。徐々に自治会ができ始めているように思えます。またトイレの使い方がよくなっています（きちんと水を流せている）。女将に明日の医療ミーティングについてのお話をしたときに、先日行われた保健師さんの巡回訪問の結果が欲しいと言われたので、明日●●さん（何でもやります隊のカウンターパートの保健師）に伺おうと思います。またその際にはこの報告書とともに観洋の状況をお伝えしようと思います。明日19時より第2回班長会議があり参加してほしいと女将に頼まれました。そこで保健師さんの巡回の報告と勉強部屋（以前班長会議で準備してほしいとの要望がありました）について話したいと思います。 朝食後、第8次隊と合流しベイサイドアリーナに行き、●●さんとお話をしました。そこで、△△さんの派遣先が歌津中学校に決まりました。△△さんの携帯電話がPHSなので歌津中学校では電波が入っていませんので衛星電話を使うように言いました。（後略）</p>
<p>◎2011年5月17日、ホテル観洋 何でもやります隊第7次隊 ○○○○ 本日は朝から熊本の□□先生（臨床心理士）においで頂き、リラクゼーション体操をして頂きました。急ぎよ決まった催し物にも関わらず30人ほどの方が足を運ばれていました。その後保健師さんの提案で毎日、有志によってリラクゼーション体操をした後にお茶会が催されることに決まりました。食事に関しては通勤・通学などで朝食、夕食を食べられない人がおられるので、その方を対象に朝は5:45から夜は22:00まで対応されます。夕食に関しては18:50までの連絡が必要となります。 本日19:00より班長会議が行われました。（中略）子どもたちの勉強部屋については明日から夕方より談話室およびロビーにて小学生から高校生までを対象にした勉強部屋が設けられました。小学生は21時までそれ以上は22時まで解放されます。私たちが勉強のお手伝いを依頼されたので、できる限りお手伝いしたいと思います。（後略）</p>

### (3) 「何でもやります隊」の効果と活動の拡大

「何でもやります隊」の隊員が避難所滞在型の支援活動を展開する中で、被災者同士では頼みにくいことや、初対面の外部者には話しにくいことを被災者が言える存在となった。避難所の夜中の状況の保健所スタッフへの報告や、被災者が必要としている行政情報の収集、子どもの変化に関するカウンセリングとの連携等を行った。避難所ニーズの変化は激しく、避難所の閉鎖や統合もある中で、支援が必要な被災者に対する継続的な生活支援や避難所の衛生環境の整備活動の中心的な役割を担うことにもなった。これらの活動は、各避難所に派遣された隊員のリーダーを通して、支援室へ報告され、必要な後方支援と対策に生かされた。

写真1は、何でもやります隊の派遣前後の様子である。派遣前のブリーフィングでは、不安と真剣さをうかがうことができるが、帰還直後の隊員の表情からは、無事に任務を果たした安堵感と、ボランティアとしての社会的自己実現を実感できたようすが見てとれる。

また、「何でもやります隊」と支援室に対する信頼関係の高まりから、派遣終了後の避難所の大掃除プロジェクトや、ダニ対策、寝具交換などの夏季衛生対策や、仮設住宅のシックハウスの疑いに基づく空気質の測定や診断、問診などの活動の拡大にもつながった。



(a) 派遣前ブリーフィング (b) 帰還直後の隊員  
写真1 何でもやります隊

### (4) 「何でもやります隊」に対する評価

何でもやります隊のカウンターパートとなった南三陸町地域包括支援センターの主任保健師による評価を表6に示す<sup>6)</sup>。

表6 何でもやります隊に対する評価の例<sup>6)</sup>

避難所では手洗いができない状態が続き、またインフルエンザや感染性胃腸炎の疑いがある患者が発生するなど、多くの課題を抱えていた。

災害時は課題が明確化されても、単純に解決策までたどり着くことができないことが多いことを実感した。「手洗い」が可能になるまでも、各避難所の状況把握やタンクの調達と水の確保、水の補給方法、タンクを設置するための台の作製等、多くの調整・支援を必要とした。そのような中、支援室からの「何でもやります隊」の派遣は、混乱の中では大いに役立った。給水タンク等の保健衛生関係の物資の提供と設置、そして各避難所のニーズ把握を避難所運営のサポートというかたちで被災者とともに生活することで、保健師の巡回訪問だけでは把握できなかった課題が浮き彫りにされた。

何事にも後追いになることが多かった避難所対策であったが、「何でもやります隊」による環境調査や防虫対策、熱中症対策、ダニ対策等は早期に対処することができた。

一定期間の避難所滞在型のボランティアである「何でもやります隊」の隊員と、通い型の一般ボランティアとの比較において「何でもやります隊」の負担は大きくなりがちであるが、カウンターパートからの評価にも見られるように、避難所における被災者の命と健康をまもるために一定の貢献を果たしたものと考えられる。

### 5. おわりに

本報では、東日本大震災の発生から約1か月後から南三陸町の避難所に派遣された滞在型ボランティアとしての「何でもやります隊」の活動概要とその意義を述べた。

「何でもやります隊」の活動は、避難者とともに生活することで表に出にくいニーズを顕在化することや、地域の保健師の活動を本来業務にできるだけ早く戻すことにも一定の貢献を果たした。また、被災者にとって求められる支援は、専門性に特化したものだけでなく、被災者との信頼関係を基礎とし、被災者に寄り添って生活面を総合的に支援するあり方も重要であることもわかった<sup>6)</sup>。

規模や条件が大きくことなる避難所ごとの状況変化を個別に把握し、タイムリーに対応するためのボランティアによる被災者支援のあり方に重要な視点を提示することができた。

謝辞：災害保健医療支援室にご協力を頂きました支援機関やボランティアスタッフのみなさまに深く感謝申し上げます。特に、何でもやります隊コーディネータを当時、担った千原正子氏（学校法人自由学園災害支援活動センター）による何でもやります隊活動報告書等から多くの貴重な記録や情報を得ました。ここに記して深く感謝の意を表します。

### 参考文献

- 1) 佐藤 健：東日本大震災時の保健医療分野における情報共有システムの緊急構築。災害情報，No.10，pp.149-155，2012.3
- 2) 千原正子：何でもやります隊ボランティア活動，東日本大震災における保健医療救護活動の記録と教訓（上原鳴夫編著），じほう，pp.126-130，平成24年12月
- 3) 千原正子，西塚あすか，早坂美保：「何でもやります隊」の活動報告と急性期避難所支援の課題，第17回日本集団災害医学会総会・学術集会プログラム抄録集，pp.504，2011.12
- 4) 佐藤 健：緊急期一救援期の情報支援および災害保健医療支援室の活動，東日本大震災における保健医療救護活動の記録と教訓（上原鳴夫編著），じほう，pp.83-88，平成24年12月
- 5) 河北新報：2011年6月11日朝刊
- 6) 高橋晶子：南三陸町の保健医療活動（上原鳴夫編著），じほう，pp.122-125，平成24年12月